



# トモダチ



SIDE B ラスティア

panda panada

わたしはラスティア。

---

わたしはラスティア。本の中に住んでいるの。  
ファッション雑誌よ。

わたしたちは、おしゃれな街やおしゃれなカフェでポーズをとって笑顔を作る。  
悲しくても淋しくても、楽しいふりをして笑顔を作る。

まわりのみんなはファッションのことで頭がいっぱいで、、、  
どうやったら可愛くうつるか、どんな洋服が自分に似合うか、  
そんなことばかり考えている。

わたしもおしゃれは大好き。  
けれど、まわりのみんなと話していても、何も感じない自分があるの。  
本当のトモダチがほしい。。。  
そんなことを、ふと、考えてしまう。

デロルと、トモダチになりたい！

---

そんなある日、デロルと出会った。  
デロルは森に落ちているわたしたちの本を拾ってくれて、汚れを拭ってくれた。  
雨に濡れないように木のウロに置いてくれて、  
そして毎日わたしに会いにきてくれた。

わたしはデロルが大好きになった。  
がんばりやさんのデロル。  
掃除が大好きなデロル。  
みんなのために一所懸命なデロル。

デロルと、トモダチになりたい！

けれど、デロルにわたしの声は届かない。  
わたしの名前がラスティアだということも伝えられない。  
閉じられた本の中では動いたり話したりできるのに、、、。

わたしたちの本はぼろぼろになった。

---

幾年も過ぎて、わたしたちの本はぼろぼろになった。  
それでもデロルはわたしたちを大切に読んでくれる。  
わたしに話しかけてくれる。  
大好き、大好きと、言ってくれる

わたしを連れて行って！

---

デロルが旅立つことを知った。  
わたしたちの本を、もちろん、持って行ってくれると信じていたのに、  
木に預けて行くと言う。  
雨に濡れるのが嫌だと言う。

濡れてもいい。わたしを連れて行って！

わたしは本の中で叫んだ。

「待って、デロル！ わたしのトモダチ！」

デロルがそこにいる！

---

なんてこと！  
気づいたらわたしは本の世界の外にいた。  
デロルの世界、デロルのいる場所。

デロルがそこにいる！

わたしは叫んだの。大声で。

「わたしも、一緒に行くわ！」

おわり